

# 地域貢献を通して教員育成コミュニティ の構築を図る一試案

伊 藤 文 一

The author has been involved in teacher education for twenty-two years; managing induction courses for new teachers for seven years, working as a junior high school principal for three years, and lecturing and researching as a university professor for over eleven years. (From 2012 to the present, the author has been the head of the Learning Promotion Center)

In the past, the university was expected to train teachers, the Board of Education to employ teachers, and schools and the Board to engage in teachers' professional development. Schools now, however, are required to follow multiple educational approaches, and teachers are also expected to respond to varying situations. Schools, the Board of Education, and universities can no longer exist in isolation and pursue their independent paths, but must collaborate to help nurture high-quality teachers. And to promote the quality of teachers, it is paramount for the school community, the school, parents, and their children to come together as one, to collaborate effectively to help achieve the same overriding goal.

This study examines the effectiveness behind the various projects the author has been involved over the last ten years to help establish a collaborative community for promoting quality teachers.

## 概要

筆者が、広義の意味で「教員を養成する」という立場になって、今年で22年になる。まず、教育委員会の指導主事として初任者研修等で7年間、現場の中学校校長として3年間、そして大学では、11年以上にわたり学生の指導を中心に関わってきた。(本学教職支援センター長(2012年度～現在に至る))

これまで実践してきたことから、これまでは、養成→採用→研修という一連の流れのなかで、「教員養成は大学」で、「教員採用は教育委員会」で、「教

員研修は教育委員会と学校」で、というような役割分担ができていた。しかし、開かれた教育課程という言葉が示すように、今日の教育現場では、画一的ではない多様な教育のあり方が重視され、また、いろいろな場面に対応できる実践力のある教員が求められるようになってきた。これら、「教員への期待」を実現させるために、教育現場、教育委員会、大学等がそれぞれで独立して事にあたるのではなく、お互いに切磋琢磨しながら教員育成コミュニティを作り、教員としての資質を向上させる必要があると考える。また、資質を高めるためには、これからは、地域社会、学校、保護者、子供等も一体となって教員育成に関わる必要性が出てきている。

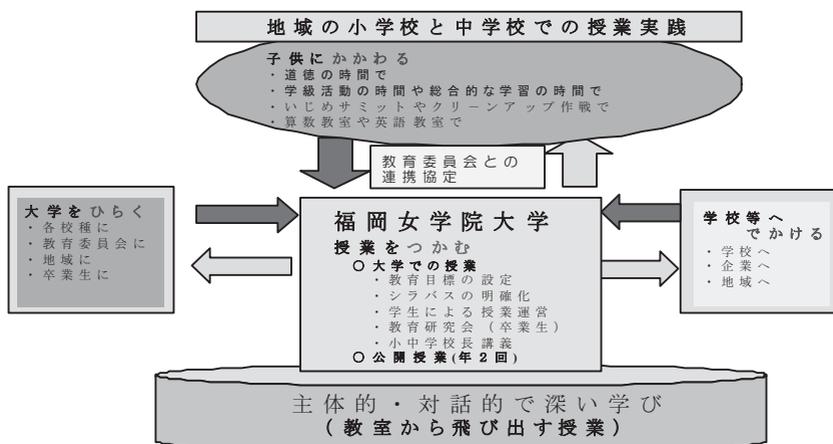
以上のことから、今回「学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けての実践的考察」という研究テーマを設定した。本研究は、筆者等がこれまでに10年以上にわたって実践的指導力を培うために実施してきた様々な取り組みを組織的・体系的に構築しながら、その有効性を検証しようとするものである。

## 1 研究の内容と方法（研究構想図）

これまでに10年以上、筆者は、下記の研究構想図に示すような取り組みを実施してきた。この取り組みの大きなポイントは、「つかむ」、「ひらく」、「かわる」、「でかける」という4つの視点である。

現在、教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法が求められている。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効な主体的・対話的で深い学びの方法である。以下の表に教員育成コミュニティとしての学びの姿を示した。

地域貢献を通して教員育成コミュニティの構築を図る一試案（伊藤）



「教員育成コミュニティの構築に向けてのプロセス」

大学1年生	幼稚園・小学校インターンシップ
大学2年生	つかむ 「教師論」学校インターンシップ 中学校・高等学校訪問 子供食堂参加
大学3年生	ひらく かかわる 「道徳教育の理論と指導法」 「道徳の時間での授業実践（春日市立春日中学校）」 「教員免許更新講習サポート」 「コミュニティ・スクール実働部隊経験（クリーン作戦、放課後学習教室参加、文化祭等）」
大学4年生	でかける 「教育実習」「教職実践演習」「学校フィールドワーク」 「福岡シティ博多ライオンズクラブ等との懇談会」

(1) つかむ（大学における私の授業）

①教師のマインドセットを変える（教育内容と教育方法を知る）

「教員が教えたこと」を「学生が学びたいこと」に変えるためには、教員のマインドセットを変える必要がある。マインドセットは、授業に臨む心構えといったようなものである。そのために「ABC理論」を用いて、指導事項の明確化を図っている。

「A」：コアカリキュラムに当たる基礎的・基本的な事項

「B」：予習・復習をすることで理解できるが、教えた方がよいと思われる  
事項

「C」：発展的な学習にあたる事項

このことを教員が意識するだけで授業が変わるように考える。そのために授業内容を精選して、少なくとも「A」つまり絶対に教えなければならないものについては徹底して教え込むことにしている。

### ②何を教えるのか（教育目標の設定・シラバスの明確化）

各授業では、筆者が編著したオリジナルテキスト（毎年改訂）を使用している。ティーチング・ポートフォリオのために、このテキストの表紙の裏側には、毎時間の授業内容と実施日を明確にしたシラバスを添付している。これには、学ぶ内容を明確にすることによって、日々の予習・復習を促すという目的がある。また、新学習指導要領の「見方・考え方」を軸にして、授業構成を行っている。

### ③学生による授業運営（あいさつ、スクランブル・コーピング・黙想）

授業の方法については、学生の意見も取り入れながら、毎時間、授業の初め・授業中・授業後、次のようなことを実施している。

- ①あいさつ      明るく元気に相手の顔を見て、「お願いします」と挨拶をする。
- ②スクランブル      席替えを行う。縦と横でじゃんけん等をして、毎回席を決める。
- ③コーピング      体をほぐして集中力を高める。
- ④黙想      テーマ（感謝等）に添って、自己との対話をする。
- ⑤発表      自分の意見を述べる。

地域貢献を通して教員育成コミュニティの構築を図る一試案（伊藤）

○教室内では、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク、セアリングの積極的な導入を試みている。これらのことを授業毎に、最低2回、取り入れるようにしている。

また、授業では、計画的に、できるだけ多彩なゲストを招聘するようにしている。各校種の先生方、教育委員会、地域の自治会、教職に就いた本校の卒業生等の方々である。

## (2) ひらく（地域の自治会長等を招いての大学での授業参観）

学内で一齐に行う授業参観以外に、筆者の授業では、年に数回、地域の自治会長等を招いての「授業参観」や「授業公開」、さらには「卒業生との教育研究会」等を積極的に実施している。

## (3) かかわる（子供と直接ふれあう授業）

平成25年から地域の小学校、公民館や施設で「算数教室」「英語教室」を開催してきた。毎回50名を超える小学生の参加があり、とても好評である。夏休みには、春日市内の希望する小学生5、6年生を大学構内に招き「夏休みチャレンジ教室」を実施したり、冬休み等に中学校で行われている学習会に学生サポーターとして参加したりしている。また、年2回行われている地域のクリーンアップ作戦（清掃活動）にも平成29年度から学生が参加し、交流を深めている。さらに、6年前から福岡市「いじめサミット」（福岡市教育委員会主催）にも学生はサポーターとして参加している。

## (4) でかける（大学から飛び出す授業）～フィールドワークの位置付け

### ① 学校へ（フィールドワークⅠ・Ⅱ・Ⅲ）

幼稚園は、大学内にあるので毎日見ることができる。特別支援学校については、介護等の体験学習に位置付けられているため、必ず知ることができる。小学校、中学校、高等学校については、教育実習だけでは十分な体験ができないので、例えば「総合的な学習の時間」、「道徳の時間」

や「特別活動」、「放課後の活動」などに各学校と相談しながら、それぞれでフィールドワークを実施している。実施の際、基本的には、1日中学校の中に入り、無理のない形で子供とふれあえるように工夫している。

#### ②大学へ

筆者は、他大学で教職関連科目の講義を行っている。この講義に本校の学生を計画的に参加させ、他大学の学生と共に学ばせている。他大学の学生との相違点を知ることでき、得るものは大きいと考えている。このことは、これまでの学生の感想文からも読み取ることができ、大変有意義だと感じている。

#### ③地域へ

上記(3)にあるように、地域の小学校、中学校および公民館等へ出向き、勉強やボランティア活動したり、イベントのサポート(春日市、福岡市)等に参加したりして資質を高めている。

#### ④企業へ(懇談会の実施)

毎年、福岡市内の中小企業の社長や役員の方々と本学の学生との懇談会を実施している。「人材育成について」・「仕事について」・「会社経営」等についての貴重な話が聞け、とても有意義な時間になっている。学生にとって、この懇談会は、人としての在り方を探究する上でとても有効であると考ええる。

### 3 研究成果の発表について

(1) 学生、地域、子供への事前・事後アンケートの実施(インタビューを含む)

①道徳の時間・総合的な時間・教科外活動・放課後の活動・長期休暇中の活動

②補導件数の変化

(例：春日市立春日西中学校コミュニティスクール1,048件(H22)→

地域貢献を通して教員育成コミュニティの構築を図る一試案（伊藤）

24件（H23）

③学力・体力の状況

④不登校の状態 等

(2) 学生の変化

・年次を追う毎の変化（ポートフォリオ）

(3) 教育実習ノート（本学オリジナルテキスト「学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて」）からの考察

・学校長や担当者からのコメント

(4) 地域の小学校・中学校・自治会長等からの評価

・地域への貢献度（学校サポーターの活躍（前・後期で15回ずつ参加）

(1)~(4)を考察後、まとめて、研究成果を毎年度以下の形で発表する。

○本学のホームページ等で発表する。

○書籍としてまとめ、配布して公開する。

#### 4 実践的指導力をもった学生の姿

小学校の校長会で「将来教員になるために資質・能力についてアンケート」（平成24年7月実施）を行ったところ、次の7項目（下記表）の力を付けてほしいという結果が出た。筆者は、これを実践的指導力と捉え、これらを育むための指導法を模索し、指導していきたいと考えている。

○人間力（例：人間関係調整力，周囲への気配り，生きる力を持つとする人間力，アサーション等）
○教育的愛情（例：強い情熱，情熱と折れない心，子どもに対する愛情，子ども理解力等）
○使命感（例：倫理観，自主性と積極性，危機管理能力，保護者対応能力，教職に対する意欲等）
○人間の成長・発展の理解（例：人権意識を正しく持てること，忍耐力と向上心，カウンセリングマインド等）

○**専門的知識**（例：採用試験をクリアする基礎学力，特別支援教育力，高めてほしい専門性等）

○**教養**（例：社会人基礎力，社会人としての常識，礼節・一般常識・ボランティア精神等）

○**授業力**（例：学習指導能力，学級経営能力，板書力や発想の豊かさ等）

※「現場の教師に必要な資質・能力についてアンケート」も似たような結果になった。

## 5 今後の方向性（本研究の着想に至った経緯などを含めて）

春日市教育委員会が進めてきたコミュニティ・スクールとのつながりは，今年で12年になる。平成20年度，春日西中学校の土曜星雲塾という学習の場に学生と共に関わり始めた。平成21年度には，春日北中学校の第三者評価委員を務めるようになった。また平成22年度からは，春日中学校の学校運営協議会委員になるなど，年々中学校とのつながりが大きくなってきている。

平成24年度，「第1回全国コミュニティ・スクール研究大会」が春日市で開催されたのだが，これまでつながりもあり，この大会では，第3会場の講師として関わることができた。

また，平成25年度からは，春日市教育委員会と本学（福岡女学院大学）が連携協定を締結したことにより，春日東中学校において中大連携を行うことになった。

さらに，春日小学校，春日東中学校や春日中学校において，それぞれの学校の学級担任と本校の学生とのティームティーチングで，「道徳の時間」の授業をさせていただいた。この取り組みについては，その後，日本教育経営学会（平成27年6月21日東京大学本郷キャンパス）で春日市立小・中学校と大学の共同研究発表の形で報告した。

春日市教育委員会学校運営委員の他，筆者は，福岡市教育委員会（教育センターグループ研修で，道徳教育講座，人権教育講座担当）に関わりだして10年が経過した。また，佐賀市教育委員会第三者評価委員（委員長），鳥栖市教育委員会評価委員，那珂川市教育委員会の評価等を行うなかで，学校イ

## 地域貢献を通して教員育成コミュニティの構築を図る一試案（伊藤）

インターンシップだけではなく、地域の行事への参加を促すことが、将来教員になる学生を育てる上で大切ではないかという思いに至った。できるだけ多くの学生を、地域の行事に参加させ、内容を充実させるためには、学生の交通費、宿泊費等の費用が必要である。今後は、山の中にある学校や離島の学校等の僻地教育の経験もさせたいと思うようにもなった。また、学校インターンシップをさらにすすめて、いろいろな体験活動を充実させるためにも、活動費が必要になると考えている。

筆者は、2015年から認定NPO法人（未来創造ハピネス）を立ち上げ、副理事長として活動している。2018年9月には、国立夜須高原青少年自然の家において中学校、高等学校の生徒、30名と共に宿泊リーダー研修を実施してスキルアップを図った。この研修を実施して学んだことは、青少年の体験的な研修の必要性である。今後は、大学生と共に体験研修を実施して、ジュニアリーダー、シニアリーダーを育成したいと考えているが、この体験研修にも活動費が必要になってくる。

今後は、実践的指導力育成のためのプログラムを作成して、その検証をしたいと考えている。

### (1) これまでの研究活動

2018年

#### (大学外での活動)

- ① 福岡市教育委員会非常勤嘱託員  
（福岡市教育センター、道徳教育講座指導者（2008年4月～2011年3月）  
人権教育講座指導者（2011年4月～現在に至る）
- ② 佐賀市教育委員会第三者評価委員（2011年4月～現在に至る）佐賀市教育  
振興計画作成
- ③ 鳥栖市教育委員会評価委員（2014年4月～現在に至る）
- ④ 那珂川市教育委員会評価委員（2014年4月～現在に至る）
- ⑤ 福岡県春日市立春日中学校学校運営委員（2011年4月～現在に至る）
- ⑥ 福岡市ライオンズクラブ夢語りコンテスト審査員（2012年4月～現在に至る）

<p>⑦ 社会活動 ○福岡市いじめ防止対策委員長（2016年～現在に至る） ○福岡市「いじめサミット」コーディネーター（2013年～現在に至る）</p> <p>⑧ 社会活動 未来創造ハビネス副理事長（2015年9月～現在に至る） いじめ、不登校等 <b>（著書・論文等）</b></p> <p>⑨ 著書 伊藤文一，「新時代の教職概論（共著）序章 教師が仕事にやりがいと魅力を感じる時」, P10～P14. ジダイ社（2018年9月）</p> <p>⑩ 著書 伊藤文一，「教育の最新事情Ⅰ」「教育の最新事情Ⅱ」（編著者）ミッションサポート（2018年7月）</p> <p>⑪ 著書 伊藤文一，「学校教育現場における危機管理」（編著者） ミッションサポート（2018年7月）</p> <p>⑫ 論文 伊藤文一・柴田悦子，「道徳科における見方・考え方の理論と実践～特別の教科道徳」実践に向けて～ 福岡女学院大学人文学部紀要（2018年2月）</p>
<p>2017年</p> <p>⑬ 著書 伊藤文一，「教職をめざす人のための教育課程論」（共著）中学校学習指導要領と教育課程編成の実際, p51～p86 北大路書房（2017年2月）</p> <p>⑭ 論文 伊藤文一，「いじめ防止プログラム」導入に向けて（1）」福岡女学院大学人文学部紀要（2017年3月）</p>
<p>2016年</p> <p>⑮ 著書 伊藤文一，「自ら学ぶ道徳教育」（共著）全教育活動における道徳教育, p76～p83, 保育出版社（2016年10月）</p> <p>⑯ 著書 伊藤文一，「つながり」を深め子どもの成長を促す教育学（共著）第9章学校と地域との信頼構築のための学校経営, p173～p183 ミネルバ書房（2016年10月）</p>
<p>2015年</p> <p>⑰ 著書 伊藤文一，「ガメラもまってる月曜日の朝 月曜日に行きたくなる学校」（編著者）権歌書房（2015年1月）</p> <p>⑱ 著書 伊藤文一，「弱みを強みに変える本気が目覚めるアクティブ・ラーニング」（共著）梓書院（2015年5月）</p> <p>⑲ 論文 伊藤文一，「生徒の人権感覚を高める特別活動についての一考察」（共著）福岡女学院大学人文学部紀要（2015年3月）</p>
<p>2014年</p> <p>⑳ 論文 伊藤文一，「メンターを活用した若手教員のOJTについての一考察」（共著）福岡女学院大学人文学部紀要（2014年3月）</p>
<p>2013年</p> <p>㉑ 著書 伊藤文一，「たのしくわかる福岡女学院の算数教室」（編著者）権歌書房（2013年9月）</p> <p>㉒ 著書 伊藤文一，「弱みを強みに変える本気が目覚める課題解決型学習」（共著）梓書院（2013年5月）</p>

地域貢献を通して教員育成コミュニティの構築を図る一試案（伊藤）

2012年	⑳ 著書 伊藤文一, 「えがおの種まき (風の巻)」(編著者) 権歌書房 (2012年3月)
	㉑ 著書 伊藤文一, 「えがおの種まき (虹の巻)」(編著者) 権歌書房 (2012年3月)
	㉒ 著書 伊藤文一, 「Teacher's Teacher 2」(編著者) 権歌書房 (2012年7月)
2011年	㉓ 著書 伊藤文一, 「君の夢 風になれ雲に乗れ」 権歌書房 (2011年3月)
	㉔ 著書 伊藤文一, 「Teacher's Teacher」(編著者) 権歌書房 (2011年5月)
2010年	㉕ 論文 伊藤文一, 「学校評価 (第三者評価) への一考察」(共著) 福岡女学院大学人文学部紀要 (2010年2月)
2009年	㉖ 著書 伊藤文一, 「青春中学校 学校通信 青春の風」 権歌書房 (2009年11月)
2008年	㉗ 論文 伊藤文一, 「校種間連携が求められる背景について I」(共著) 福岡女学院大学人文学部紀要 (2008年2月)
2007年	㉘ 著書 伊藤文一, 「信頼を創造する公立学校の挑戦」(編著者) ぎょうせい (2007年3月)

(2) 研究環境 (研究遂行に必要な研究施設・設備・研究資料等を含む)

①学校インターンシップ協力校 (下記の学校・園には, 学校運営委員 (評価委員) として筆者が関わっている。)

- ・ 幼稚園 (学校法人大原幼稚園, 福岡女学院幼稚園)
- ・ 小学校 (春日市立春日小学校, 那珂川市立岩戸小学校)
- ・ 中学校 (春日市立春日中学校, 那珂川市立那珂川北中学校, 福岡市立金武中学校, 福岡市立高宮中学校)
- ・ 高等学校 (福岡女学院高等学校, 福岡市立福岡西陵高等学校)
- ・ 特別支援学校 (体験学習を実施する学校)

②研究資料

- ・ 福岡市教育センター図書室

- ・福岡女学院大学図書館
- ③その他（少年の家等）
  - ・国立夜須高原青少年自然の家等の施設